

小中学生を対象としたキャリア教育：群馬における建築職業教育を例に

著者名(日)	岡田 悟, 深井 準一
雑誌名	共立女子短期大学生活科学科紀要
巻	55
ページ	77-80
発行年	2012-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002574/



小中学生を対象としたキャリア教育 — 群馬における建築職業教育を例に —

岡田 悟・深井準一

Career Education for Pupils on Architecture in Gunma pref.

Satoru OKADA and Junichi FUKAI

Abstract

In this report we introduce a career education program for pupils on architecture in Gunma pref.. Through the questionnaire for parents of pupils, following results were ascertained :

- 1) Most of parents hope that pupils will get wide culture.
- 2) This program may help pupils to win independence in future.

キーワード：Career Education キャリア教育, Pupils 小中学生, Architecture 建築,
IT 情報技術

I. はじめに

2001年に「情報教育における高校大学間の連携について」という論文をこの紀要に載せた¹⁾。生活科学科では2001年以前から情報機器を用いた教育を行ってきたが、2001年頃は情報教育が一部の高校で行われ始め、また、コンピュータが家庭に普及しつつあった時期であった。従って、学生全員が入学して初めてコンピュータを扱うことを前提としたそれまでの短大での教育プログラムを、こうした状況に対応して改変する必要が生じ、この論文もこのような事情を反映したものであった。

現在は、その後高校で情報の授業が必修となったこともあって、短大入学生のコンピュータリテラシーが高まり、また、コンピュータを扱うスキルの個人差も以前に比べて格段に小さくなった。そのため、10年前とは異なって、短大での情報教育のスタートラインをどこに置くべきかに関して、それ程大きな戸惑いは無くなっ

ている。

一方、短大入学前にコンピュータスキルを一通りマスターしているためか、何かの目的を達成するために手段の一つとしてコンピュータを使うという思考回路より、コンピュータでこれができるからやろうといった発想を持つ学生が多く見られるようになった。例えて言うなら、外国人がまず日本語を習って使えるようになり、次に日本語を書くために日本語ワープロソフトを習おうとするのではなく、日本語ワープロソフトの使い方を習えば、日本語を使えなくても日本語を書けるようになることを考えることに似ていよう。従って、情報システムを利用できるようになることと、何を目的として情報システムを利用するのかを自覚することは、車の両輪のように不可分のものとして教育の中で位置付けられなければならない。

筆者らは、以上のような立場から、主に建築、インテリア分野において、小中学生を対象に、情報システムの利用方法と利用目的を共に視野

に入れた試験的な教育を試みている。群馬という地域を対象として選んだのは、

- 1) 大都市部と異なって人間関係が濃密であり、子供の成長過程を追跡調査できる
- 2) 都心から約100kmの所にあつて子供の進路に多くの選択肢が用意され、教育効果が進路に反映されやすい

という理由からである。

この教育の効果は小中学生の成長に伴つて検証する以外になく、長期的にわたつて測定していかなければならないが、本稿では現在までの状況を報告し、以後の検証に備える礎としたい。

Ⅱ. 活動内容

1. ぐんま未来創造塾

ぐんま未来創造塾は、小学生を中心とした年少の子どもたちを対象に、「学び」が職業・仕事にどう役に立つのかを、具体的に建築という分野を通して体験してもらう学習の場である。教育の現場では、知識基盤社会の時代などと言われているように、社会の構造的な変化の中で「生きる力」を育むことが重要になっている。このように、学校が変化しようとする中で、社会に出て生活する上で必要となる能力、あるいは仕事をする上で必要とされる能力を育成することは、学校教育のキャリア教育への課題を踏まえ、子どもたちにとっては十分に意義あることである。

2. キッズくらぶ

「建築・情報技術（IT）という職業から学問を学ぶ」をテーマに、小学生を中心とした体験型学習サークルを組織して、定期的に講座を開催している。小学生・中学生・高校生と世代別・年齢別にグループ分けし理解能力に応じて、学習メニューを提供し、その学習目標として

- ① 学びのベクトルを「進学」に向けるのではなく、将来就きたい興味ある「職業」へ向ける。
- ② 仕事に役に立っている技術・技能に年少

のうちから触れさせることで、子どもたちの興味を引出し、その潜在能力を的確に伸ばす。

- ③ 学習する根拠を明確にすることで、意欲と共に理解できるという実感を子どもたちに持たせる。

の3点を挙げている。

3. キッズペアレンツ

厳しい社会環境の中、子どもを育てる親たちも「生きる力」の重要性を自身の経験を通して痛感している。子どもたちと共に、社会生活に役に立つ実践的な知識・技術を学ぶことは、教育的観点からも目指す目標への共有認識を持つことに通じる。ぐんま未来創造塾、キッズくらぶに子供を参加させている親たちも、キッズペアレンツという形で、共に参加し学ぶことの喜びを感じてもらうことが、教育の原点となる。

Ⅲ. キッズくらぶの実例

1. 講座および学習内容

対象：小学校4年生から6年生

募集参加人員：10名

期間：夏休み期間中の平成23年7月26～28日、延べ9時間実施

費用：無料

内容：① キャド（CAD）って何…CADの基本操作

② キャド（CAD）でお絵かき…簡単な図形から作図

③ キャド（CAD）でフラッグをデザイン…直線・曲線を用いてオリジナルフラッグを作成し、着色を施す。

④ 住宅の間取り作成およびパース・鳥瞰図作成

使用ソフト：JWCAD・せっけい倶楽部

2. 組織と運営方法

組織の運営については、設計分野（建築・機

械・設備)で実務の傍ら、高校・専修学校で実学教育に携わる講師が活動の中心メンバーである。特に、建築分野においては、建設不況と言われて久しいが、その状況は好転せず業界自体その活力は未だ望めない。さらに、少子高齢化による若年層の減少と相まって、建築を志す生徒・学生も減少し、高校や専修学校の建築科や建築コースが募集停止する事態も現実になっている。そんな将来、地域の建築関連の技術者が減少するのではないかという危機感から、年少の子どもたちに少しでも、建築の面白さとその興味を持ってもらうことを願い、底辺拡大の活動を地道に行っている。具体的な運営方法は次のとおりである。

- ① 資金調達：企業・個人の賛同・理解を求め協賛者を募り、その協賛金で運営する。
- ② 講座の告知および実施方法：
 - ・小中学校に直接出向き、活動の趣旨を伝え、受講生募集の告知チラシ配布
 - ・PTA組織に後援依頼
 - ・地域公民館の生涯学習組織への出前講座

3. 今後の展開

児童・生徒が将来自立した職業人として生きていくために、必要な能力と資質としての「キャリア発達に関わる能力」を具体的に提示することで、学校でのキャリア教育の在り方に一石を投じ、その手法を参考にしてもらいたい。キャリア発達は個々の子どもそれぞれで異なるが、一人ひとりの発達を促すようきめ細かく支えていく必要があると考える。そして、子ども一人ひとりが身に付けていく能力を的確に把握することは、子ども自身が自分の良さや可能性に気づき、夢と希望を持ち、その実現に向けて努力するきっかけになるはずである。その過程の中で、この組織・講座が継続的に指導援助することで、子どもたちのキャリア教育の礎となるものと信じ、活動していきたいと考えている。

IV. 活動の成果

教育効果の検証に向けて基礎資料を得るため、現在キッズくらぶに通う子供12名の保護者10名(兄弟等で参加している例があるので、子供の数より少ない)を対象に以下の設問のアンケート調査を無記名方式で行った。対象者はいずれも桐生市川内町に居住し、子供の学年は小学校4～6年である。アンケートは平成23年9月下旬に戸別訪問により配布、回収した。回収数は9通、回収率は90%であり、設問ごとの回答状況も以下に載せた。

- 問1 保護者の現在の主たる職業分野をお答え下さい
1. 建築, インテリア分野 0 (0%)
 2. IT分野 1 (11%)
 3. それ以外の分野 8 (89%)
- 問2 現在受講されているお子さんの性別は
1. 男 8 (89%)
 2. 女 1 (11%)
- 問3 どのような目的でお子さんを「キッズくらぶ」に参加させましたか
1. 広く様々なことを学習して欲しいと思い、その一環として 9 (100%)
 2. 建築, IT等の理工系に興味を持って欲しいと思って 0 (0%)
 3. 建築, インテリア分野に興味を持って欲しいと思って 0 (0%)
 4. IT分野に興味を持って欲しいと思って 0 (0%)
- 問4 お子さんには、どちらかと言えば、将来どちらの人になって欲しいと思いますか
1. 社会に役立つ人 3 (33%)
 2. 自分の夢を実現する人 6 (67%)
- 問5 お子さんには、どちらかと言えば、将来どちらの人になって欲しいと思いますか
1. 高い専門的な知識, 技能を持つ人 2 (22%)
 2. 広くバランスのとれた知識, 教養を

持つ人 7 (78%)

問6 問1で答えた職業分野の10年後の将来像をどのように予測しますか

1. 盛んになる 0 (0%)
2. 現状を維持する 7 (78%)
3. 衰退する 2 (22%)

以上の回答結果より、キッズくらぶに参加させた親に対しては、建築、インテリア分野、IT分野以外の職業を持ち、男の子を、広く様々なことを学習して欲しいと思い、その一環として参加させ、子供の将来については、自分の夢を実現し、広くバランスのとれた知識、教養を持って欲しいと思い、なお、今の自分の職業分野の状況は10年後も現状を維持すると予測している、という平均的な姿を描き出すことが可能である。

こうした全体傾向の中で、特別な傾向として、問5で将来子供に高い専門的な知識、技能を持つ人になって欲しいと答えた2名が挙げられる。この2名は問1で唯一IT分野の職業を持つと答えた人、および、問2で唯一女の子を(姉妹で)参加させている人である。一方、両名とも問4では「自分の夢を実現する人」になって欲しいと答え、問3の答が100%で「広く様々なことを学習して欲しい」であることから、特定の職業分野で社会に大きく貢献して欲しいと子供に願っているわけではないと判断されるが、子供は職業的に自立するのが望ましいという考えを持っていることがうかがえよう。

V. 結 び

今回、群馬で行われている草の根的な手弁当での活動の一端を紹介することが出来たと思う。また、アンケート調査からは、建築、インテリア分野、IT分野以外の職業を持つ親が、子供に広く様々なことを学習して欲しいと思い、その一環としてキッズくらぶ参加させていることが知られた。しかし、同時に、自分の夢を実現する人よりも積極的に社会に役立つ人になって

欲しいと考えている親もいることがうかがえた。

このことは、キッズくらぶのように、実務や教育に携わる各人が高校生、さらには小中学生に自分の専門分野を学ぶ魅力を伝えることによって、広く様々なことを学習して欲しいと思う親の期待に応えることができると共に、将来子供が高い専門的な知識、技能を持って社会に大きく貢献する萌芽とすることができることを示唆しよう。

参 考 文 献

- 1) 岡田悟, 川西哲夫, 山森芳郎「情報教育における高校大学間の連携について」共立女子短期大学生活科学科紀要第44号, 2001.1